

主題：ローマ人への手紙第5章から第8章——聖書の核心

メッセージ 10

主を愛することと、その霊の内なる感覚を気にかけることによって、
命の法則の中で生きる

聖書：ローマ8:4, 6, 10-11, 28-29. I コリント2:9-10, 15. II コリント2:12-14

- I. 命の霊の法則は、わたしたちの霊に内住している命を与える霊としての、手順を経た三一の神です。復活の中で、キリストは法則（自動的な原則、自然な力）として命を与える霊と成りましたが、それによって彼はご自身をわたしたちの三部分から成る存在全体の中へと分与することができます——ローマ8:2-4, 6, 10-11, 34：
- A. わたしたちの霊の中の、命の霊の法則として、霊なるキリストは、思い、感情、意志のような内側の各部分の中へと拡大します。このようにして、彼はわたしたちとミングリングされて、わたしたちの命の供給となります。わたしたちが彼を享受している時はいつも、わたしたちは本物のクリスチャン、キリスト・人です——エレミヤ31:33. ヘブル8:10。
- B. 命の法則の機能は二重です。(1)わたしたちを神格においてではなく、命と性質と表現において神とならせ、わたしたちを神の長子のかたち形成して、彼の団体の表現とならせること（ローマ8:2, 28-29）、(2)わたしたちをあらゆる種類の機能をもったキリストのからだの肢体に構成すること（エペソ4:11-12, 16）。
- II. 初めの愛をもって主を愛することは、わたしたちの霊の中で命の霊の法則を運行させるための第一の要求です：
- A. 初めの愛をもって主を愛することは、彼に首位、第一位を与えて、彼の愛によって押し迫られ、わたしたちの生活の中で彼をあらゆるものと見なし、またあらゆるものとして取ることです——啓2:4-5. コロサイ1:18後半. II コリント5:14-15. マルコ12:30. I コリント2:9-10. 詩73:25-26。
- B. わたしたちが主イエスを信じた時に受けた命はまさにパーソンであり、このパーソンを適用し、享受するたった一つの道は、初めの愛をもってこのパーソンを愛することです。わたしたちの命である主イエスはパーソンですから、今この瞬間に、そして日ごとに彼の臨在を享受するために、わたしたちは彼との新しい接触を必要とします——ヨハネ11:25. 14:5-6. I テモテ1:14. II コリント5:14-15. 啓2:4-7. コロサイ1:18後半。
- C. 「主を愛することに没頭しなさい。そんなにも優勢な道は他にありません。また、そんなにも安全で、そんなにも豊かで、そんなにも享受に満ちている道は他にありません。ただ彼を愛しなさい。他の何かを気にかけてはなりません」——「雅歌に描写された命と建造」、第?? ?章。
- D. わたしたちが彼を愛するとき、彼はご自身をわたしたちに現し、彼と御父はわたし

たちの所へ来て、わたしたちと共に彼らの住まいを造ります（ヨハネ14:21, 23）。
こういうわけで、わたしたちは例えばこのような祈りをする必要があります、「主よ、わたしにあなたの愛を見せ、あなたの愛をもってわたしに押し迫り、わたしがあなたを愛し、あなたに生きるようにしてください」、「主よ、わたしに常にあなたを愛し続けさせてください」。わたしたちは絶えず主に告げなければなりません、「主イエスよ、あなたを愛します。主よ、わたしをあなたの愛の中に保ってください！ あなた自身をもってわたしを魅了してください！ 常にわたしをあなたの愛情深い現在の臨在の中に保ってください」。

E. 主の回復は、初めの愛、最高の愛をもって主を愛することの回復であり、また命の木である主イエスを食べて、キリストの有機的なからだを建造するための、すなわち、神の永遠のエコノミーの最終目標である新エルサレムを建造するための回復です——エペソ4:15-16、啓2:4-5, 7、22:14：

1. 召会生活の内容はキリストの享受にかかっています。彼を享受すればするほど、内容はますます豊かになりますが、キリストを享受するためには、初めの愛をもって彼を愛する必要があります。
2. もし主に対する初めの愛を離れるなら、わたしたちはキリストの享受を逃し、イエスの証しを失います。その結果、わたしたちから燭台は除き去られてしまいます。これら三つの事（主を愛すること、主を享受すること、主の証しとなること）は相伴います——2:1-7。

III. 霊の内なる感覚を気にかけることは、わたしたちの内側で命の霊の法則を運行させるための第二の要求です。誰もが学ばなければならぬクリスチャン生活の秘訣が、ローマ書第8章6節に見られます（「肉に付けた思いは死ですが、霊に付けた思いは命と平安です」）。それは、命の霊の法則であるキリストを霊的に経験することに関する聖書の中で最も重要な節です：

- A. 神は命の霊の法則としてわたしたちの霊の中におり（I コリント15:45後半、II コリント3:17、II テモテ4:22、I コリント6:17）、自己はわたしたちの思いによって代表される墮落した魂であり、墮落した体は肉です。
- B. 思いを肉に付けることは、肉の側に付き、肉と協力し、肉を支持することを意味します。思いを霊に付けるとは、霊を気にかかけ、霊の側に付き、霊と協力し、霊を支持すること、すなわち、わたしたちの霊に注意を払うことです——マラキ2:15-16。
- C. 命と平安を知る道は、霊の内なる感覚によります：
1. 命の感覚は、満足、強さ、新鮮さ、潤い、照らされること、油塗りの内なる感覚です。内側深くでこれらのものを感じるとき、それが命の感覚であり、この感覚はあなたが霊にしたがって歩いていることを証明します。
 2. 平安の感覚は、外側の状況の中の平安ではなく、内側の安心や慰め、調和、安息、喜び、自由の感覚です。
- D. わたしたちが肉の側に付く時はいつも、わたしたちは死の内なる感覚、意識を持ちます。わたしたちは不満足、虚しさ、弱さ、古さ、渇き、暗やみ、圧迫、不和、不一致、不快感、不安、苦痛、束縛、悲しみを感じます。死の感覚はわたしたちに対する警告としての機能を果たし、肉から救い出されて、霊の中で生きるように促す

はずです——ローマ8:4, 1:9。

E. わたしたちが霊にしたがって歩いているか、その霊によって歩いているかは、わたしたちに命と平安の内なる感覚があるかどうかでテストされます。もしわたしたちが霊を魂と区別しようとするなら、理性的な思い、感情、意志を否んで、霊の内なる感覚を顧みなければなりません——マラキ2:15-16, ヘブル4:12。

IV. わたしたちが霊の内なる感覚を気にかけて、命と平安の内なる感覚に従うとき、わたしたちは彼の比類なき行動のゆえに、からだのかしらである主を尊んでいます。使徒パウロは彼の福音の奉仕においてキリストのとりこでした。彼は外側の環境によって管理されていたのではなく、「わたしの霊には安息が」（Ⅱコリント2:13）あるかどうかによって管理されていました。彼の霊は彼の存在の最も傑出した部分であったので、彼は彼のミングリングされた霊によって管理され、支配され、方向づけられ、動かされ、導かれていました（Ⅰコリント2:15, ローマ8:16, Ⅰコリント6:17, Ⅱコリント2:12-14）:

A. 主イエスだけが収穫の主です（ルカ10:2, ヨハネ4:35）。彼だけが主人であり、からだのかしらであるので、わたしたちは自分自身の中で決定を下さないで彼を尊ばなければなりません。彼だけが頭主権を持っているので、彼だけが唯一のリーダーです——エペソ1:10, 22, コロサイ2:10, Ⅰコリント11:3, マタイ23:8-12。

B. あなたが自分自身によって他の人のために下すどのような決定も、その霊に対する侮辱です。もしあなたがこの事を行なったなら、あなたは悔い改めなければならず、必要なら、人に許しを求めなければなりません。なぜなら、あなたは彼らが何をすべきかについて指示を与えたからです。誰一人として、他の人にどこへ行くべきかを絶対に告げるべきではありません。これは主に対する何という侮辱でしょう！

C. もしわたしがこの事を行なうなら、そのことを他の人に祈ってもらう必要はないでしょう。それどころか、彼らは単純にわたしの言葉にしたがって行動するでしょう。こうすることは、主の地位を奪い、自分自身を主とすることです。これは主に対する最大の侮辱です——Ⅰペテロ5:3, Ⅱコリント4:5。

D. あなたは他の人たちが主と接触するように助ける必要があります。若い兄弟姉妹たち、あなたがたは祈る必要があります。ある人は心を動かされて、運動に加わるかもしれませんが、主との個人的な接触を全く持ちません。誰もが主の導きがはっきりするまで祈らなければなりません。誰もが主の臨在の中にもたらされて彼と接触しなければなりません。

E. 主は多くの人を大学のキャンパスへ導くかもしれませんが、おそらく彼の主権の中で、あなたが行くことを許さないでしょう。これは、わたしたちの間で行なわれていることが運動ではなく、絶対的に主の導きの事柄であることの証明となるでしょう。

F. わたしたちはみな、だれも他の人に代わって主に行くことができないという、この学課を学ばなければなりません。最終的に、わたしたちはこう言うことができるでしょう、「わたしがこの場所に行こうとしているのは、わたしがそのことを主に尋ねたからです。そして彼はわたしをそこへ行くように導きました」。しかし、あなたは、ある兄弟があなたもそうするように励ましたという理由で、決してどこかへ

- 行ってはなりません。
- G. 決してだれにもどこかへ行くように告げてはなりません。主の回復の中にいる人は誰でも直接主に行って、祈らなければなりません。他のだれかに、あなたはこれを行わなければならないと要求しないでください。わたしたちは誰も主ではありません。イエス・キリストだけが主であるので、わたしたちはみな彼にこう尋ねなければなりません、「主よ、わたしはどこへ行くべきでしょうか?」。パウロのクリスチャン生活はこのように彼が尋ねた時に始まりました、「主よ、わたしは何をすべきでしょうか?」。このような質問をする人たちは幸いです——使徒22:10。
- H. あなたが主の回復の中で起こすどんな行動に関しても、あなたは直接主ご自身に行って、祈らなければなりません。あなたは主があなたを遣わしているという確信を持たなければなりません。誰も他の人に指示を与えたり、人に代わって決定を下したりすべきではありません。
- I. 【注意】この事の唯一の例外は、パウロと彼の同労者の小集団において見られます。それは十人を超えていませんでした（シラス、テモテ、テトス、ルカ、プリスカとアクラ夫婦、ソステネなど）。この小集団の人たちは最も狭い意味でのパウロの同労者たちでした。パウロの同労者の小集団の中では、すべての事がパウロを通して調整されていたので、彼らはパウロの権威と指示を絶対的に受け入れていました。
- J. 主の行動に対して、わたしたちもからだによって調和が保たれる必要があります。交わりが祈りに続きます。あなたがたが祈りと交わりを持った後、はじめて主の導きが明らかになります。
- K. もしわたしたちが他の人たちと祈らず、交わりもしないなら、主を侮辱しており、彼の地位を奪っており、からだを尊んでいません。しかも、わたしたちが祈りと交わりなしに移住するなら、テストや患難や迫害が来るとき、わたしたちは震われてしまうでしょう。
- L. もしあなたが祈って、交わるなら、かしらなる主を尊び、またからだを尊んでいます。その時、あなたは主がそこあなたを遣わしたという確信を持ち、外側の状況がどうであれ、あなたの移住を決して後悔することはないでしょう——参照、コロサイ2:19。
- M. あなたは、自分がそこにいることは主の意志、導きであり、そこで死ぬ覚悟ができているほど確信を与えられるでしょう。あなたには確信があるだけでなく、強められて、主の主権を与えられるでしょう。
- N. 召会において、また聖徒たちに関して、わたしたちは二つの要素（その霊とからだ）を気にかけていなければなりません——エペソ4:4前半：
1. わたしたちは、自分の行なっていることがその霊の中にあり、それがからだの唯一の一を顧みていることを確信しなければなりません。
 2. 霊（わたしたちのミングリングされた霊）の中にあることと、からだの唯一の一の中にあることは、主の回復の中に保たれることです。